

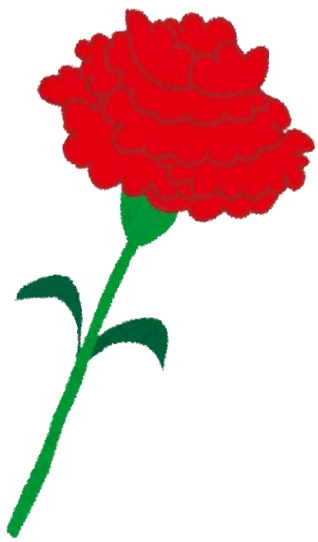
令和六年度 鍵谷祭協賛垣生中俳句会 (五月) 入賞作品

金賞

よそ見して母の日渡す一輪花

三年

なかなか素直になれないお年頃。よそ見をしながらも母の日に花を渡すあたりが愛らしいですね。「一輪花」という耳慣れない表現はわざとでしょうか？調べてみると「UKI」というアーティストさんの「一輪花」という楽曲があったので聴いてみました。内容から考えてこの曲を踏まえたものではないでしょうが、わざわざ「一輪」と限定しているところに思春期の微妙な感情が表れています。「花一輪」と「一輪」を最後に持つてくることで、より印象深くしてみるのも良さそうです。

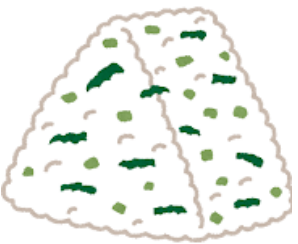


銀賞

祖母の家変わらぬ庭と新キャベツ

三年

毎年訪れる祖母の家は、毎年同じようにあたたかく迎えてくれるものです。幼い頃から遊び親しんだ庭は昔と変わらず実りが豊かで、そんな庭の様子からは毎日祖母が慈しみ手入れしていることがうかがえます。来る度に祖母は美味しいものをたんと用意してくれているのでしよう。新キャベツのシャキシャキとした食感が実に美味しそうですね。年齢を重ねた「祖母」と「新キャベツ」がさりげなく対比されているのが心に響きます。



銀賞

おにぎりの塩をふりたす夏来たる

三年

夏は太陽も植物も生き生きとして、万物にエネルギーが漲ってくる気がします。夏の気配に運動量も増えていたのでしょうか。おにぎりを食べるとなんだか物足りない気がして塩を振り足す。汗をかいたからか、いつもより塩分を欲していたんですね。夏の訪れを「おにぎりの塩をふりたす」時に感じたという感性が光る一句です。

銅賞

母の日になれない手紙手渡した

二年

こちらにも思春期の子が母の日に感謝を伝える場面を詠んだ一句。「よそ見」していた子と比べると、「なれない」ながらも手紙を書き綴り、面と向かって手渡す様子に真摯な姿勢がうかがえます。不器用ながらも誠実に日頃の感謝を伝えようとする姿がなんとも愛おしいですね。お母様も嬉しかったことでしょう。手紙に込めた感謝の気持ちはきっとお母様に届いていますよ。

銅賞

風薫る校舎内では黙想中

二年

「風薫る」は、草木を渡つて清々しく匂うように吹いてくる心地よい夏の風を讃えた季語です。「黙想中」故に感覚が研ぎ澄まされ、初夏の匂いや若葉の擦れる音、やわらかな風の感触を深く感じたんですね。似た季語に「青嵐」や「青葉風」がありますが、エネルギーで勢いのあるこちらの季語に比べ、「風薫る」は穏やかでさりげない感があります。だからこそ、「黙想」と相性が良いのでしょうか。「青葉風」が使われている次の句と読み比べてみると面白いかもしれません。

く起立礼着席青葉風過ぎた 神野紗希く

銅賞

母の日やウソの買い出しサプライズ

三年

素直に読めば、母の日にサプライズのため嘘の買い物をお願いした／されたという句です。ここに提出されているということはおそらく前者でしょう。母の日のためのものではないと嘘を吐いて自ら買い物に行ったとも読めなくはないですね。様々な解釈ができそうな一句です。「買い出し」という語を選択したのはわざとでしょうか。「買い物」や「買い出し」といった類語を調べて吟味した上でこれぞという一語を選び抜く推敲作業を試みるのも良いかもしれません。

入選

- そよ風でクスノキゆれる夏の朝 一年
- スーパ―に苺ミルク買いに行く 一年
- 朝行くと上着が見えず夏近し 一年
- 自転車でぬるい風ふく夏近し 一年
- 水ぞく館魚がいつぱい夏の昼 一年
- 垣生の道町のにぎわい夏来る 一年
- 母の日に送る言葉で首まがる 一年
- 夏近し植物たちも衣がえ 二年
- 風を切り空高くおよぐ鯉のぼり 二年
- 妹とむく空豆の皮かたし 二年
- 水筒の水を飲みほす夏近し 二年
- 夏近しもうすぐはだが焼き肉に 二年
- クラス見て合服増える夏近し 三年
- 小学生夏を伝える七分丈 三年
- 万緑や俳句初めて九年目 三年
- 花咲かせ青空の似合うライラック 三年

